

児童虐待の人類学的アプローチの必要性（試論）

所属：東京都北児童相談所

発表者名：○田中良幸

【目的】 グローバル化とは、子育ての考え方や方法が多様化する事である。視点の違いにより虐待の認識も異なる。グローバル化時代の児童虐待を、人類学的視点から考える必要性和妥当性を、明らかにする。

【方法】 文献研究及びスノーボール方式による半構造化面接調査を実施した。対象者は、韓国3名（女性30代2名40代1名）、中国2名（男性30代男性1名、女性40代1名）、フィリピン1名（女性30代）独逸人男性の日本人配偶者1名（女性30代）の合計7名。対象者の偏りと少人数のため、面接記録から「語り」として必要部分を抜粋し提示する。

【結果】 韓国では各家庭に体罰用の棒があり、子どものふくらはぎを棒で叩く事は一般的に躰として認められている。棒の使用は、親が冷静で躰として叩く事を表す。親が手で叩くのは親が冷静さを失った結果であり、暴力と解される。中国内陸農村部では虐待概念自体が一般的ではなく、認識に地方差がある。フィリピン人からみると、日本の慣習を知らないと父親が低年齢の娘と一緒に入浴は性的虐待を連想させる事がある。また、ドイツでは熱発時に大人も子供も冷水に浸かるので、子どもを見ず風呂に漬けた時は当初は状況が理解できず、日本人の感覚では許容できなかった。このように、文化間では、同じ行為であっても認識のされ方が異なる可能性が高い事が確認された。社会的多数派、慣習として承認がある言動は、虐待行為としては社会的に認識されないことが確認できた。この結果から、虐待概念の相対性の検討が認められた。

【考察】 疾病については既に医療人類学として分野が確立しており、社会科学的または自然科学的立場から医療を探索するアプローチが確立している。虐待は政治的構築物である一方、文化的文脈の産物でもある。日本においても、第二次大戦後のすべてが欠乏状態であった混乱期の子育ては、当時は皆が類似の生活を送っており、着の身着のまま空腹の子どもを親のネグレクトとする人はいない。同様にアフリカの飢餓問題を虐待と捉える人はいない。その意味で時代背景や地理的文化的背景を考慮した検討は不可欠である。虐待とはどのような状態を指し、その社会の人びとから承認されているかどうかにより、その概念は変化する。先に例の他にも、承認されている民間療法、通過儀礼等に関連する暴力的言動はその社会では問題としないことが多い。社会や文化的背景の違いによる、当事者や周囲の人々がとる対処の方法、その意味、児童相談所等の特定の支援者の介入方法を社会が承認する制度、虐待観念や支援方法等を検討し、結果に対しては国内法適用であっても、その経緯については十分な比較検討を行う事で、その当事者や家族にとっての言動の持つ意味を解明する姿勢が今、求められている。

文献：レスリー・マーゴリン著、中河伸俊・上野加代子・足立佳美訳『ソーシャルワークの社会的構築：優しさの名のもとに』明石書店 2003、波平恵美子『医療人類学入門』朝日新聞社 1994、進藤雄三『医療の社会学』世界思想社 1990、杉田聡・近藤正英訳『逸脱と医療化——悪から病へ』ミネルヴァ書房 2003、上野加代子『児童虐待の社会学』世界思想社 1996、内田良著『「児童虐待」へのまなざし』世界思想社 2009、